

結果構文の認知意味論的考察

野 島 啓 一

Abstract:

The purpose of this paper is to identify the cognitive factors which contribute to the development of resultative constructions. In this study, diachronic considerations are given to find clues of robust nature to the grammaticizing processes which lead to the establishment of this construction. Evidence is presented to show that about 40 % in a count of type of verbs which are examined here are verbs of Latin origin. It is claimed that the large flux of non-indigenous verbs helped the resultative construction to develop new cognitive conditions which have promoted the productivity and expansion of this construction.

Finally, three working hypotheses, which are supposed to facilitate conformity to this pattern of construction, are fully-detailed with concrete examples.

キーワード: 「結果」からみる、新事象の成立、観察点の移動

結果構文の認知意味論的考察

認知言語学的なアプローチを出発点にして、構文レベルで規定されている「結果構文」の解釈について、通時的観点と動詞の語源からの考察を踏まえ、関連する諸事象を検討する。結論として、英語の結果構文は、①結果の基準から、②新しい事象の成立を原因となる事象と結びつけて知覚して、③観察点の移動がこの新事象の成立に必要なことを主張する。

議論の枠組みを示す。最初に、検討する結果構文のタイプを例示する。次に、上述した三つの主張の根拠を通時的な考察から求める。最後に、認知意味論的観点から、英語の結果構文は、「句」を構文記述の始発的な単位とする趣旨を反映した体系化を示す。

- (1) He broke the vase into pieces.
- (2) He pushed the door open.
- (3) I shouted myself hoarse in three hours.
- (4) The dog barked him awake.
- (5) The river froze solid.

本研究の例文は全て先行研究からの引用である。例文(1)、(2)は他動詞構文で、例文(2)のタイプはME以降に発達した。その特徴は、結果を表わす表現単位(以下「結果の句」)が動詞の語彙構造等のレベルで予測できないことである。例文(3)は再帰代名詞を、例文(4)はhimを、各々、目的語に元来とらない動詞が他動詞構文で使われている。例文(5)は自動詞構文である。

一番目に、最初の主張内容である、結果の基準から二つの事象を関連づけている点を検討する。後述するように、結果構文の動詞の約40%はラテン語を語源とする。このラテン語では、関係文等の構文を用いて、二つの出来事を因果関係的に表現した。

- (6) Tam longē aberam ut nōn vidēram.

例文(6)は「私は遠く離れていたのだから、見るができなかった」の意味

で、結果を表現する単位は従属文である。この結果の意味は、含意される傾向に過ぎない。このラテン語の表現形式が英語で「結果の句」を基準とする見方の確立に寄与したと考える。即ち、結果からみてその原因を関連づける表現形式として結果構文を捉える見方である。より直接的な根拠として、前置詞fromを伴う構文を検討する。

(7) Who kept her from drenching in the sea?

例文(7)はChaucer Concordance (B. ML 845)からの引用である。「Who kept her from drenching in the sea?」の現代語訳から、「海で溺死する」という結果からその基準に至らせない行為を原因とみなして関連づけ、未実現の結果を表わす表現形式である。この構文で使われた23個の動詞で、OEを語源とするのはhinder、stop、free、spareで残りの19個はラテン語を語源とする。

次に、「結果の句」が、結果からみる基準としての独自性をもつ根拠を動詞の語源から考える。例文(2)のpushはラテン語を語源としてME期に英語に入った。「結果の句」が表わす事象が動詞の語彙構造に含まれないからこそ、動詞が表す事象を原因として、その事象の結果内容も、複文形式でなく単文形式の表現として、拡張・発達した可能性がある。結果構文で使用された動詞を調べると、見出し語数267例の内訳で、OE語源の動詞とME期以降でOE語源以外の動詞は、各々、161例(60%)、106例(40%)である。106例の内、その83%はラテン語を語源として残りは擬態語と擬声語である。この数的傾向も単文形式の結果構文を確立させる裏付けとなり得る。議論の要約を仮説として以下に提示する。

仮説1「結果の句」を基準とすることでのみ、その基準からみて動詞が表す事象を原因として関連させて捉えられる。

一般的に、事象の結果の意味は、動詞による含意の表現や、複文形式で因果関係の表現として表わされる。しかし、仮説1は、「結果の句」を基準と

結果構文の認知意味論的考察

する見方の確立が単文形式で結果の意味を表すことを可能にする。

二番目の議論として、結果の知覚は、新しい事象の成立によるという見方を検討する。つまり、何をもって「結果の句」で表わす事象が成立するかである。例文(1)のように「花瓶を割る」動作の後で、「粉々である」状態が生じるタイプは結果構文の一部に過ぎない。例文(2)や次の例文のように「結果の句」が表わす事象を確定させる特性が必要である。

(8) The joggers ran the pavement thin.

「結果の句」の表現がそれ自体の出来事として知覚されるには、認知的観点から次の仮説が必要である。

仮説2 結果の事態は、ある状況の場面で新たに生じた出来事という知覚が必要である。

仮説2の「新事象の成立」の知覚について考察する。

(9) *He did not paint the wall white.

例文(9)は、結果構文の否定形で非文法的である。この新事象の成立を知覚するからこそ、その原因となる出来事に関連づけることが可能になる。しかし、例文(9)では、「結果の句」の事象は意味の一部であるので、動詞が表わす原因としての事象を否定することは、この新事象成立の前提を否定することになり仮説と矛盾する。

(10) a. She sprayed the dirt off (the wall) / b. the wall off.

(11) a. She sprayed the paint on (the wall) / b. *the wall on.

例文(10)で、a型は結果構文で、b型は従来の目的語をとる構文である。例文(11)はb型の結果構文が非文法的である。無くなるという新たな事象には、「有か無か」の最小必要限に関する知覚を particle の off で表わすことが可能である。一方、例文(11b)の非文法性は、先行研究等の指摘通り、限界点等を示す更なる表現を「結果の句」が必要とする証拠になる。つまり、新しい事象の成立を知覚することで「結果の句」が特定される。

三番目の議論として、「観察点の移動」が結果構文の成立に必要な認知的要因であると主張する。例文 (3) で、shout は元来目的語に再帰代名詞をとらない。この例文では、「彼が大声をだす」という事象の知覚と「彼の声が囁れている」という事象の知覚とは、同一の対象に関して異なる事象であると認知する必要がある。この二つの事象を関係づけて知覚するには、その基準となる観察点が移動する必要がある。「声囁れ」の主体が同一対象であると認知する仕方が再帰代名詞に反映されている。この関係成立の基準を「観察点の移動」として主張する。

仮説3 観察点が移動することで、同じ対象に関する異なる局面を新事象と認知し、関係づけが成立する。

(12) a. *We yelled hoarse. b. *The dog barked him.

例文 (12 a) の非文法性は、同じ観察点では異なる事象が同時に知覚できないことを反映する。例文 (12 b) の非文法性は、bark は他動詞でないことによる。前置詞 at と「結果の句」awake とを加えた結果構文の形式でも非文法的であることは、bark を含む例文 (4) の文法性と対照することでわかる。例文 (4) で bark が表わす事象の対象は主語の dog であり、him は前置詞の目的語である限り awake が表わす新事象を知覚する観察点での対象にならない。

(13) The sprinters run the shoes worn out.

同様に、例文 (13) は、自動詞の他動詞的用法が結果構文で可能な例である。run は前置詞を介しても目的語をとらない。「結果の句」が表わす新事象は観察点の移動で知覚でき、その移動により知覚の対象が構文的には目的語 (= shoes) として捉えられる。更に、この知覚の対象は、「走るのに (選手が) 使う靴」という、主語に関係してより絞り込まれた対象である。

例文 (5) のタイプを仮説3の観点から検討する。仮説3によれば、複数の「結果の句」を表現することは、観察点の移動を伴わないで新事象を知覚

結果構文の認知意味論的考察

することになり矛盾が生じる。例文 (14) は仮説 3 の裏付けになる。

(14) *The river froze solid, crystal-clear.

(15) This bread cuts into pieces easily.

対照的に、例文 (15) のように「結果の句」を伴う中間構文が可能である。即ち、表現の意味内容が類似している中間構文では、adjunct の easily と「結果の句」の into pieces とは解釈の適用基準が違う根拠になる。

以上から、仮説 1-3 は、結果構文の構文的な特徴を認知論的な観点から捉える根拠となる。仮説 1 は構文が確立する契機を捉え、仮説 2 はすべてのタイプに共通な条件になる。仮説 3 は構文に固有な統語的特徴を把握する。最後に、三つの仮説を反映する文法モデルを考える。結果構文の形式的な特性は二つの事象を単文の形式で表現することにある。構文文法的なアプローチに倣って、「結果の句」からなる単位とそれを除いた動詞句からなる単位とを構文記述の始発的単位と考える。自動詞型の結果構文以外では、統語的には目的語が二つの構文的単位の枠内で共有されている。

(16) NP [Pred1 {(NP)} Pred2]

表示 (16) で、Pred1 は動詞句、Pred2 は形容詞句等の句であり、(NP) は重複する目的語である。二つの単位 (=[] と {}) は対として機能する syntactic primitive で、構文レベルの意味の成立は仮説 1-3 によると考える。

要約する。通時的観点を踏まえて、英語の結果構文の特徴を分析して、認知的な方法による体系化を主張した。

参考文献

- Borkin, A. (1984) *Problems in Form and Function*, Ablex, Norwood, NJ.
- William Croft and D. Alan Cruse. (2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press, Oxford.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, On Semantic Principles*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele. & Ray Jackendoff. (2004) *The English Resultative as a Family of constructions. Language 80 vol.3.*
- Jackendoff, Ray S. (1990) *Semantic Structures* MIT Press, Cambridge, MA.
- 影山太郎. (1996) 『動詞意味論』くろしお出版, 東京.
- Langacker, Ronald. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford, CA.
- Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, Chicago University Press.
- Lightfoot, David. (1991) *How to Set Parameters: Arguments from Language Change*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 宮崎清孝・上野直樹. (1987) 『視点』(認知科学選書1) 東大出版会, 東京.
- 本田啓. (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』 東大出版会, 東京.
- Napoli, Donna Jo. (1989) *Predication: A case study for indexing theory*, Cambridge University Press, Oxford.
- Reed, Edward.S. & Jones, R. (1982) *Reasons for Realism* (『直接知覚論の根拠』 境敦史・河野哲也訳 勁草書房)
- Rombaro, Thomas J. (2000) *The Reciprocity of Perceiver and Environment* (『ギブソンの生態学的心理学』 古崎敬・境敦史・河野哲也監訳 勁草書房)
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford University Press, Oxford.